

教師が学び続ける内容の質的変容

これまで受けてきた教育によって既にチャッターが身につけている人々が教師になる場合、自分自身のチャッターを克服するとともに、子どもたちへのチャッターの拡大再生産を防ぐために何をどのように学ばよいか。

自分のチャッターを克服するために、まず、自我発達段階と社会の発展過程の関係からこれからの社会の発展の方向性を知ることが必要です。自我発達段階の研究によって個人の見方、考え方や欲求のあり方には人類共通の発達法則があることが明らかになっています。そして、各時代に特定の地域に暮らす人々の平均的な自我発達段階が後の段階へと進むことと社会の発展との間には相関関係があると考えられます。このことと、先に述べた二十世紀の教育において良心的段階までの発達が目標とされてきたことから、良心的段階の後に続く自我発達段階の見方、考え方がこれからの社会の発展の方向を規定する可能性が高いことが予想されます。このことについては第2章で具体的に説明していきます。

次に、現在の自分の自我発達段階の重心と発達課題の経験状況を確認することが必要です。第2章で詳しく説明しますが、自我発達段階はマトリョーシカ人形のような入れ子型の構造

で、前の段階を超えて含む形で外側へと発達していきます。私たちは一つの発達段階だけに属するのではなく、場面や状況によって複数の自我発達段階の見方、考え方や欲求を用いています。その中でも現在頻繁に用いている見方、考え方から自我発達段階の重心を知ることができません。自分の自我発達段階の重心となる段階を含めてその内側にある各段階の発達課題について十分に経験できているか確認することで、これまで意識化されていなかったチャッターに気づくことができます。自分のチャッターを意識した上でそれらを克服する視点を知らなければならないならば、チャッターを超えて自分らしく生きるための具体的な努力の方向性を明確にし、実践することができます。このことについては第3章でありたい教師像の例を参考にしながら確認することができます。

子どもへのチャッターの拡大再生産を防ぐために、まず、理想とする子ども像の中に、子どもの将来の発達を妨げるチャッターが含まれていないか確認し、それを超えて子どもの発達を促す視点を知って実践に移すことが必要です。このことについては第4章で例を参考にしながら確認することができます。そして、教師としての目標の中に含まれる自分らしく生きることを妨げるチャッターと自分らしく生きようとする魂の声を聴き分けて、自分らしさを活かせる目標を設定する必要があります。このことについては第5章で例を参考にしながら目標設定をすることができます。さらに、教師も子どもたちも自分らしく生きることを目

指す学級や学校づくりに向けて、本来目指している教師像と理想とする子ども像をより具体化する必要があります。その際に、第6章で示すこれからの教育の在り方と教師に求められる役割の変化についての新しい発達論の視点からの考察と教師としての理想や目標を再設定するためのチェックポイントが参考になるでしょう。そして、最後に教師と子どもたちのチャッターを減らすためのチャッターとの付き合い方についての手掛かりとチャッターを完全に克服する可能性について示します。

まとめると、本書ではこれからの社会において教師が学び続ける内容として、まず、教師が自らのチャッターを自覚し、超えるための学習が挙げられます。具体的には自我発達段階と社会の発展過程の関係から社会の発展の方向性を知ること、自分の自我発達段階の重心と発達課題の経験状況を確認すること、自分のチャッターを意識した上でそれらを克服する視点を知ることを通して、チャッターを超えて自分らしく生きるための具体的な努力の方向性を明確にし、実践することです。

次に、子どもへのチャッターの拡大再生産を防ぐための学習が挙げられます。具体的には、理想とする子ども像に子どもの将来の発達を妨げるチャッターが含まれていないか確認し、それを超えて子どもの発達を促す視点を知って実践に移すこと、教師としての目標に含まれ

るチャッターと自分らしく生きようとすると魂の声を聴き分けて、自分らしさを活かす目標を設定すること、教師も子どもたちも自分らしく生きることを目指す学級や学校づくりに向けて、目指す教師像と理想の子ども像を具体化することです。

これらの学習と実践の具体的な内容は自我発達段階の重心が後の段階へと進むにしたがつて、変化していきます。そのため、本書の内容は、教員養成段階、初任段階、初任から数年たった段階と数年おきに繰り返し見直して、自身の教師としての見方、考え方の成長や自我発達段階の重心の移動を確認することが大切です。

教育的愛情とマルトリートメント

教育哲学者の苦野一徳氏は『愛』で、愛の本質は相手の存在によって私の存在意味が充ち溢れているという感情と、それでいて相手を決して自分の思い通りにしたりしない意志という一見両立しがたいものを両立させた状態であると述べています。特に教育では相手を決して自分の思い通りにしようとしめない意志がなければ単なる調教であると言いつつ切っています。

苦野氏の主張に基づけば教育的愛情とは、あたたかく見守りながら必要に応じてよさや可能性を引き出す支援をすることで子どもが成長しつつある姿を喜ぶ感情と、子どもの意思や権利を尊重して決してそれに反する強制をしない意志が両立した状態と言えます。

しかし、現実には、このような教育的愛情を抱き続けることは困難で、教師や親はしばしば自分の思い通り動かない子どもを力づくで動かしたくなる欲求にかられます。また、教室マルトリートメントのような不適切な指導が「子どものために」行われてきたことも事実です。それに、禁止や強制を一切行わずに子どもたちを指導することは不可能です。

では、教師は、教育的愛情の高い理想と教室マルトリートメントの状態に陥りやすい現実との間でどう折り合いをつけていけばよいでしょうか。まず、教師を目指す人は基本的に子

どもが好き、あるいは、指導する教科の学習活動が好きの人が多くと思います。苦野氏によれば、「好き」と好きな対象それ自体を大切に思う気持ちを一定期間継続する中で「愛着」が生まれるけれども、その際、自分の欲望にこだわってしまうと「愛着」が「執着」になって、「愛」に育てることができなくなります。「愛着」を「愛」に育てるにはナルシズム、すなわち自己不安を打ち消そうとする利己的な欲求が障害となるため、あるがままの自分を承認することでナルシズムを克服し、人格的に成長する必要があります。教育的愛情を育てることに当てはめれば、まず教師になりたい動機に含まれる「好き」という気持ちを明確にし、好きな対象それ自体を大切に思う気持ちを育てることが大切です。そのとき、チャッターから生じる不安に動かされて自分が本当に大切にしたいことを見失わないよう意識することです。子どもの成長や教師の仕事に対する愛着を育てる必要があります。そして、子どもの成長や教師の仕事に対する愛着を教育的愛情に育てるために、チャッターから生じる不安に動かされて自分の欲望にこだわり過ぎてしまわないよう意識し続けることも必要になります。

私たちは、しばしばチャッターの声を自分の欲望と誤解して本来の自分の願い、すなわち魂の声を見失いがちです。チャッターの声と魂の声を聴き分けることで教師や大人があるがままの自分の姿や願いを承認すること、すなわち自己愛を育むことが子どもたちに対する教育的愛情を育む基盤となります。詳しくは、後の章で扱いますが、ここではチャッターから

生じる不安に動かされて自分の欲望にこだわりそうな場面を思い出し、チェックリストの各項目について「よくある」「時々ある」と思うものにチェックを入れましょう。チェックがついた項目について、もしもそのようなことがなかったとすればその場面で自分はどうか、そういう自分になれたらどんな教師になりたいか考えてみましょう。

.....
チャッターのチェックリスト（よくある・時々あるものにチェック）

- 周囲の目が気になることがある
- 無理に周囲に自分を合わせようとすることがある
- 自分の意見を発言するのをためらうことがある
- 自分と異なる意見を最後まで聞かずに否定することがある
- 自分の意見の正しさを主張して話し合いが決裂することがある
- 周囲の人々に自分の好みや考え、意見が受け入れられず腹を立てることがある
- 物事が計画通りに進まないときに自分の責任を感じることがある
- あるべき姿から外れている自分や他人の姿に腹を立てることがある
- 想定通りに物事が進まない場合に不安を覚えることがある
- 失敗したり間違えたりしたときに自分を責めることがある